

随 想

中国・雲南省の2つの旅

佐々木 教祐

今年の2月、菜の花が満開のころ、ベトナム、ラオス、ミャンマーに接する中国の雲南省の自然を巡る旅に出た。広大な棚田が美しいベトナムに近い山間地・元陽と昆明の東約240kmにある菜種の生産地・羅平での菜の花めぐりと黄金の菜の花の中に石灰岩の小山が美しい風景を見に行くツアーに参加した。ここ雲南省の省都は昆明市で、省名は雲嶺（四川省との境の山地）の南にあることに由来する。荒涼とした岩山が目立つ中国の中であって緑の森林に恵まれており、高速道路から目に付くビニールハウスによる花卉の栽培が盛んで、北京、上海などの大都市にも出荷している。少数民族も多く、漢民族67%、イ族11%、ペー族3.6%、ハニ族3.4%などで、13世紀に元の軍隊がここを占領した時に残った兵士たちが作った村もまだ残っているとガイドの曹さんの説明があった。主要農産物は全国1位のタバコ、2位の天然ゴム、3位の蔗糖、5位の茶葉と続き、鉱物資源も豊富である。

雲南には2007年11月に雲南省の北西部が接しているチベットにむかし馬で雲南のお茶を運んだお茶の道“茶馬古道”沿いにある麗江、シャングリラ、さらにヒマラヤ山脈の東の端に位置し、チベット仏教の聖なる山、まだ誰も登ったことのない梅里雪山(6,740m)が展望できるチベット自治区のすぐ手前にある徳欽まで旅行したが、帰りに雪に降られ崖っぷちの道を怖い思いをして帰った思い出がある。少し古いが、まず“茶馬古道”沿いの見どころから紹介したい。

“茶馬古道”を巡る旅

中部国際空港から広州へ飛び、昆明を經由して麗江空港に着く。バスで世界遺産の麗江古城に行く。ここ麗江を元、明、清の3代の王朝から統治を任された木氏はナシ族の豪族でチベットとの交易により富を築いた一族で、22代470年の長きにわたって統治した館を木府と呼び、その背後にある獅子山の上に建つ5層の楼閣は33mで万古楼と呼ばれ、その山に登ると美しい麗江の街全体が見渡せる。瓦葺の屋根が軒を連ねる古城地区には、石畳の道が縦横に走り、水路が網の目のように張り巡らされている。水路には玉龍雪山からの澄みきった水が絶えず流れている。また麗江にはナシ族が使っている象形文字のトンパ文

字が残っており、今では読み書きできる人も少なくなったが、実際に使われている唯一の象形文字とのことであった。

次の日はロープウェイに乗って、玉龍雪山の展望台（写真1）4506mまで登り、ナシ族の聖なる山・玉龍雪山 5596mが、きれいな青い空に雪をかぶった白銀が素晴らしいコントラストを見せていた。さらに茶馬古道をバスで進むと世界遺産の三江併流すなわち険しい山地に金沙江(長江)、瀾滄江(メコン川)、怒江(サルウィン川)が交わらずに平行に流れている地域がある。金沙江が大峡谷に挟まれて川幅が最も狭いところでは30mしかなく虎跳峡と呼ばれている。ハイキングコースが川沿いにできており、終点の虎跳峡は展望台が用意されており、轟々と流れる様は壮観で、コース往復で5km、2時間のコースである。さらにバスで進むとジェームズ・ヒルトンの小説「失われた地平線」の舞台になった理想郷シャングリラがこのエリアがそのモデルであるとのこの地方政府が主張して2002年に香格里拉(シャングリラ)と名称を変えてしまった。今夜はここで宿泊する。



写真1. 玉龍雪山の展望台

次の日は、高山植物や手付かずの原生林が残り透明度が10数メートルに達する紺碧の湖・碧塔海周辺を散策する。湖の周りは木道が整備されており5kmを2時間で歩く。シャングリラの街に戻って昼食をとり、バスで徳欽の街に向か

って出発する。途中、金沙江月亮湾という山の周りをぐるっと川が回って流れているところを観光し、さらにバスで東竹林寺というチベット仏教の700人が修行をしているお寺を見学し、さらに走って徳欽のホテルに着く。宿に着く2時間ほど前からみぞれがぱらつき始め、宿の明珠酒店は暖房もなく寒い。この地方はマツタケの産地と聞いていたが、採れる時期が8月なのでほかのキノコに代わった。次の朝、起床すると窓の前に止めてあるバスの屋根には15cmくらいの雪が積もっていた。晴れていたなら窓の正面に見える梅里雪山は雲に覆われ見えない。気温は-5℃くらい。9時ごろ雲が少し晴れて梅里雪山の山並みの神女峰と右の端が見えてくる。朝食は饅頭、おもゆ、うどん、ザーサイなど、熱いお茶が最高のごちそう。10時過ぎに明永氷河に向けてバスで出発。約1時間で明永村につき昼食。ここの料理は野菜が主で味付けは薄くおいしい。食堂から10分ほど歩きロバくらいの小型のウマに乗る。馬はおとなしく、2頭の馬に馬子はひとり。私は片手にカメラを構え、写真を撮りながら1時間半ほど馬に乗る。馬に乗るのは初めてだが、振動の多い坂道では鐙に足を踏ん張ってお尻をあげて揺れを吸収すると結構乗りやすかった。太子廟というチベット寺院の前で馬を下り、山道を少し歩き30分ほど氷河の端にある木道を歩いて氷河が見下ろせる展望台に着く。氷河の先端は黒く汚れていたが、崩れた痕は氷河特有の水色の氷が見えた。帰りは太子廟から少し下ったところでまた馬に乗った。下りは揺れが大きいので写真を撮るのは諦めて、黄色く染まった秋の美しい景色を眺めて下った。夕食は昨夜と同じ宿で薄味のついた汁にいろいろな野菜を入れて食べる火鍋料理であった。

次の日、シャングリラに戻る道は雪が積もっていたが、途中から晴れてきて白茫雪山を真正面に望む白茫峠では雪をかぶった白茫雪山の雄姿が見られた。また雪は湿気が少ないのでさらさらとしており、雪合戦のボールを握ってもすぐばらばらになってしまう。シャングリラに着く前にナパ海(標高3226m)と呼ばれる湿地帯に着く。希少動物の黒頸鶴が数羽見られたが、夏には草花が咲き乱れるナパ海だが、今は秋も遅いので花はないが、のんびりと草原を散策できた。次に雲南省最大のチベット寺院・松贊林寺に向かう。この寺院の創建は明代末期で、文化大革命で破壊されたが、再建が進められ、雲南のポタラ宮と呼ばれる壮大な姿を取り戻しつつある。金色屋根の寺院が美しい。お坊さんだけには鳥葬がまだ残っているようだ。シャングリラはサフランの産地と聞き、薬屋で5.6gを300円で、お茶屋さんでは紅茶を買った。シャングリラに泊まり、翌日シャングリラから飛行機で昆明、広州を経由して帰国した。

棚田と菜の花を巡る旅

中部国際空港から広州を經由して昆明の空港に着く。次の朝、少数民族のハニ族、ブイ族が暮らす高原の棚田の村・元陽まで380kmの長いバスの旅で、建水で600年前の明代に建てられた街の門にあたる朝陽楼を見学し、夕方に元陽の坝達(バーダー)の棚田へ到着する。ここは断崖絶壁の上に展望台があり、霧がかかった幻想的な景観を見せてくれた。展望台から見下ろすと多くの棚田に張られた水が夕日に反射して絵のように輝いて見えた。



写真2. 猛品の棚田(田には水がはってあり、光の反射が美しい)

元陽は紅河ハニ族イ族自治州のほぼ中央にあり、住民の大多数をハニ族とイ族が占め、そのほかタイ、ミャオ、ヤオ、チワンなどの民族も暮らしている。この町が広く知られているのは、哀牢山脈の南麓に沿って1000年以上にわたってハニ族が作り上げた棚田(中国語で梯田)があるからで、元陽県内にある棚田だけでも130km²の規模に及んでいる。棚田は朝日に輝く水面、霧の下に広がる雄大な景観、夕暮れに染まる紅色の風景など時間帯や見る角度、天候や季節によってさまざまな表情を見せてくれる。さらに元陽の棚田は村々をつなぐ道路から谷に向かって広がっているので山に登ることなく景観が楽しめるのも人気の秘密らしい。次の日は、朝日に輝く棚田撮影の絶好ポイントとして知られている多依樹(タイジュ)の棚田に行ったが、出発するときから霧・霧・霧で棚田を

見渡す展望台に着いても霧が晴れず、諦めかけていた時、突然さっと霧が晴れ20分ほど素晴らしい棚田の風景を見せてくれた。帰りには展望台から見えた棚田の一番上にあるキノコの形をした茅ぶきの屋根が載った家が並ぶハニ族の村に寄って生活を垣間見せてもらった。また村から棚田をま近かに見たり、ハニ族の美しい民族衣装の女の人たちにも会うことができた。少数民族の女の人達は、民族ごとに独特の衣装を身にまとい、衣装を見ただけで民族が分かる。元陽のホテルに帰り、町の市場で活きた鯉や生きたアヒル・鶏、たけのこ、カリフラワー、菜の花、インゲン、大根、セリ、白菜、ネギ、しょうが、山芋などのほか知らない野菜も売っていた。日本に帰ってから新聞報道で、上海を中心に鳥インフルエンザ H7N9 が感染し始めており、30人以上の死者が出ていることを知った。マーケットで生きたアヒルや鶏を見に行ったので少し心配していたが、雲南省はまだ感染者が出ていないので少し安心した。夕方には猛品(モウヒン)の棚田(写真2)で夕日鑑賞、ここの展望台は10層以上にもなっており、一番下の展望台から一番上の駐車場まで戻るのに30分以上かかるという大規模なものだったが、その風景もそれに値する素晴らしいものだった。



写真3. 牛街から見た菜の花の渦巻田

次の朝、霧の元陽に別れを告げ440kmの長い移動の後、菜の花が見渡す限り

咲いている羅平の名所・金鷄峰に着いた。ここは羅平の菜の花の撮影ポイントで道路の両側にはお土産屋や牛車で菜の花畑を案内する人などで混雑していた。ここからの眺めは最高でカルスト地形の小山と菜の花の絨毯は圧巻だった。年間平均気温は15℃、2-3月の平均気温は12℃前後で全県、全山菜の花畑で見渡す限りの黄色い絨毯を敷き詰めたようになる。景色を楽しんだ後バスで標高1700m近くの道路脇から見下ろすビューポイント・牛街(ギウガイ)(写真3)でも夕日に染まる山の斜面に菜の花で渦巻きや巻貝の模様が描かれたメルヘンな絵本を楽しむことができた。羅平の菜の花畑は2000km²で油菜の種の年生産高が3000万kg、毎年1月の中旬から3月の中旬までの約2ヶ月が菜の花の時期で、古くから羅平は菜種油の産地として名高く、最近ではこの菜の花畑を利用した観光にも力を入れている。菜の花の収穫が終わると、4月からはタバコを植えその収穫が9月、その繰り返しになるそうだ。また蜂蜜の生産も盛んで中国一といわれ、全国の養蜂家が花を求めて集まる。

次の日は、羅平の町から東北約22kmの所にある九龍瀑布へ行った。ここは中国6大瀑布の1つで、一番美しい瀑布と云われている。僅か4kmの長さの中に大小10以上の滝が見られ、一番大きいものは神龍滝と云われ、高さ56m、幅114mで滝壺の近くに行くと流れ落ちる水と音で大変迫力がある。ケーブルカーで上がった展望台からは九龍瀑布と周りの山麓に広がる菜の花畑が一望でき、観光客は民族衣装を着た地元ブイ族による手作りの黄色い菜の花と青や赤の草花の冠をかぶり楽しんでた。帰りにブイ族の村を訪ね5色米による五彩飯など民族料理の昼食を食べ村を散策してから、昨日の金鷄峰に戻り、青空の下で約200段の階段昇り、中ほどに建つ金鷄寺を抜けて、さらに階段を上ると峰の中腹に設けられた展望台に着く。眼下に菜の花の黄色が陽光に映えてカルスト地形の小山が黄色の中に連なっていた。次にバスで1時間ほど走り、観光客はいないけれど景色の素晴らしい十万山観景台に登った。山を取り巻く菜の花が満開なのでどちらを見ても素晴らしい風景で、天気も良く遠くには桂林の山並みも見られた。最後にもう一度、巻貝田の牛街に行つて菜の花を見納めて、次の朝、世界遺産の石林に移動した。約2億8000万年前は海底だったが地殻変動とその後の風雨による浸食によって削られたカルスト地形は、中国でも有数の観光地となっている。見渡す限りの鋭く尖った岩々が作り出す景観は圧巻、まさに石の林だ。石の林と花海棠を楽しんで、夕方の飛行機で昆明から広州へ飛び、ここで1泊して8日間の旅を終えて帰国した。

(名古屋大学名誉教授、健康文化振興財団理事)